

戦後イギリスのネオ・ファシスト団体の思想と行動

- 1980年代及び1990年代の「イギリス国民党」(BNP)の活動について -

Thoughts and Movements of Neo-Fascists Groups in Britain after War

- The Actions of the BNP during the early 1980s and 1990s -

楯 沢 栄 一

Eiich Gumisawa

On this essay, I research the actions of the British National Party during the early 1980s and 1990s. First I consider the establishment of the BNP and its course. Especially I make reference to the thoughts of J.Tyndall who was leader of the NF but left it in the early 1980s. Next I consider the political line of the BNP as to elections in the local arena. Besides I consider some racial incidents the BNP concerned with. It is obvious that the BNP was involved in racists attacks contemporary Britain.

Taking it in to consideration, we will reveal the realities of the BNP and consider why they took such radical actions as to murder ethnic minority. We can recognize there a minus scene for British society since 1945.

1. はじめに
2. 「イギリス国民党」の設立
3. 「イギリス国民党」の政治路線
4. 人種差別的暴力事件の多発
5. むすびにかえて

1. はじめに

20世紀がまもなく終わろうとしている今日、近代国家は新しい局面に立たされているか

のようである。それは17世紀に民族対立や宗教対立を封じ込めながら成立してきた近代国家が、20世紀において二つの対戦を経験し、この世紀末にあつて共産・社会主義の崩壊を目の当たりにする中で、極めて深刻な問題に直面しているからである。資本主義あるいは社会主義イデオロギーにおおいつくされていた近代国家は、ある意味で無理矢理に民族や宗教対立の問題を封じ込めていたのが、そのイデオロギーの終焉と同時に、かつての対立の封印が解かれたのである。ロシアを中心とするかつての社会主義諸国でも、西ヨーロッパを中心とする自由主義諸国でも、発展途上国を脱したかに見えたアジア諸国でも、貧困と人口爆発に苦悩するアフリカ諸国でも、古くて新しい問題である民族対立や宗教対立問題が、様々な形で噴出してきていることは間違いない。

特に欧米諸国を見ると、戦後大量の移民を受け入れた結果、民族間の対立が不気味な胎動を伝えている感がある。民族主義を掲げる右翼団体が、少しずつ国民の支持を広げつつある状況は、21世紀に持ち越された近代国家のまた試練でもあるのかもしれない。これらの団体は、「極右」(Extreme Right)、「新右翼」(New Right)、「国家大衆主義者」(National Populists)等の名称を与えられながら、その思想と行動が注目される場所である。⁽¹⁾ もちろんその国々で事情は若干異なるが、共通するのは、第二次対戦後に大量に流入してきたアジア・アフリカ・中東を含む第三世界からの移民に対する民族的対立感情と、労働市場への彼らの参入によりもたらされた本国人の慢性的失業率の高さに対する不満である。この不満は特にヨーロッパの場合には若者に多く、彼らが「極右」や「新右翼」のシンパとなり、また実際に構成員となり活動している場合が多い。これらの若者は、反体制・反社会的思想の象徴であるかのように「スキンヘッド」(Skin Head)といわれる頭を剃り上げた異様な風貌で、徒党を組み行動をしている。また、サッカーというヨーロッパでは国技に近く、それだけに民族感情を煽るスポーツにおいて、しばしば暴徒化し一般市民を巻き込み騒乱事件を起こしている「フーリガン」(Hooligans)⁽²⁾と呼ばれる若者集団もある。彼らの場合は両方を兼ねている者も少なくない。これらの若者が、「極右」や「新右翼」の大きな活動源になっていることには間違いはないが、このような団体を支持し構成員となる人々には伝統的な民族主義者ももちろんいる。彼らは筋金入りの民族主義思想の持ち主と言ってもよく、生物発生学的人種差別論者もいれば、文化的あるいは宗教的人種差別論者もいるのである。

ヨーロッパ諸国の中でイギリスに注目すると、「極右」や「新右翼」活動は比較的小となしくそれほど目立たないものとされてきた。⁽³⁾ しかし、このことは逆に水面下で陰湿な

人種差別的暴力事件が多発し、大きな社会問題になっていることも事実である。社会的認知度が低ければ低いほど、この種の団体は、活動を地下に移し陰湿化するのである。イギリスの「極右」団体の活動はその典型といってもよいかもしれない。⁽⁴⁾

本稿では、イギリスの今日最も注目すべき「極右」団体ないし「ネオ・ファシスト」団体として活動している「イギリス国民党」(The National British Party - 以下BNP)について考察したものである。70年代勢力を持った「国民戦線」(National Front - 以下NF)⁽⁵⁾から80年代初頭に分裂し、90年代に入り地方で議員まで輩出するに至ったBNPについて、この団体の成立過程と政治路線、さらに、この団体の引き起こす人種差別的暴力事件について言及し、その問題点を指摘してみたい。

その前に、今日いかにイギリス社会が、この種の「ネオ・ファシスト」団体のテロに怯えているか紹介しておきたい。99年の4月22日に、バングラデシュ系移民が多く住むロンドン東部のブリュックレーン区で爆弾テロ事件が発生し7人が負傷したというニュースは、我が国にも大きく報じられたところである。しかし、これに先立つ17日に、アフリカ系移民の多く住むロンドン南部のプリストン区の路上で鉄クギ爆弾が爆発し39人が重軽傷を負うという事件があり、極右のテロが連続して起こっている。⁽⁶⁾かつて北アイルランド系の武装組織による爆弾テロが続発していたイギリスとは、少し様相が変わってきている。この二つの事件は、白人優位を説く極右組織「コンバット18」(Combat18 - 以下C18)⁽⁷⁾という組織からの犯行声明があり注目されているが、確たる証拠は今のところないようである。このC18はBNPとも深い関係にあった。つまり、何人かの構成員が両方の組織を重複していたり、活動をともしていた時期もあつたのである。但し、93年以降BNPはC18をテロ組織と断定し一線を画している。しかし、イギリスの一般市民にとって、過去の経緯からして、両者の区別がどれほど出来ているか疑問である。同じテロ組織でも北アイルランド系の組織は、組織も明確で軍隊色が強く統率のとれているが、このC18は組織の実態把握も難しく、行動の予測もできない新しいテロ集団との位置づけを、警察当局もしている。

80年代下火になったかと思われた「ネオ・ファシスト」団体が、90年代に入り再び活発化してきていることは確かである。しかも無差別テロというより危険な形で出現してきている。これらはイギリス社会に巣くう移民問題の深刻さを窺わせるものである。昨今のコソボ紛争でも問題となった「民族浄化」の思想などの外からの影響も含め、イギリスの移民問題の今後が注目されるところである。

2. 「イギリス国民党」の成立

80年にすでにNFの委員長職を辞していたJ・テンダル(John Tyndall)は、82年8月に完全にNFから離れBNPを設立することになる。彼がNFから離れ、新しい組織を作る過程をここでは見てみたい。

67年に設立したNFは、まさしく戦後の「極右」グループの寄せ集めの感があった。⁽⁸⁾もともと盤石な組織ではありえず、内部抗争もめずらしくなかった。70年代半ばから後半にかけて、NFには二つの大きな派閥があった。一つはテンダルやM・ウェブスター(Martin Webster)を中心とするラディカル・ポピュリストのグループと、もう一つはドイツのG・シュトラサー(Gregor Strasser)の影響を受けたとされる「シュトラサー派」(Strasserits)⁽⁹⁾のグループである。しかし、テンダルとウェブスターは、同じような政治遍歴を経てNFの設立や発展に寄与したが、必ずしも仲の良い関係ではなかった。70年代後半になると彼らの関係は険悪なものになっていた。後者は俗物的なところがあり、「フリーガン」や「スキンヘッド」の若者と積極的に接触し、なによりも同性愛者であったことが前者には気に入らなかった。前者と言えば、でしゃばりもったいぶった性格のため後者としばしば対立した。⁽¹⁰⁾ 80年代にNFの中心的存在になるA・ブロンズ(Andrew Brons)やR・フェラール(Richard Verral)など「シュトラサー派」とはもともと折り合いがあわなかった。さらに対立の原因に「縦隊88」(Column 88)と言われるナチスを信奉する秘密結社との関係がある。「シュトラサー派」はこの組織から活動資金をうけていたとされる。⁽¹¹⁾ ところがテンダルはこの結社には友好的ではなかった。「縦隊88」はアメリカのCIAの支持と資金を受けた「グラデオ・ネットワーク」(Gladio Network)に関係し、このネットワークは反共主義団体として陰で謀略活動を行い、イタリアやベルギーでは爆弾テロや殺人まで行っている。目的は、反共主義の全ヨーロッパ流布である。⁽¹²⁾ テンダルはむしろ島国的精神の持ち主のところがあり、英連邦の白人やアメリカ南部の白人に支持を期待するものであった。「縦隊88」に対する態度で「シュトラサー派」との対立は、テンダルをして、NFを去る大きな原因であったのである。むしろ、主流派であった「シュトラサー派」から、除名に近い扱いを受けていたのである。

一方、ウェブスターに関して言えば、彼はこの当時まだNFの中で全時間を費やしていた。4,000人ほどになったメンバーを組織し、出版活動を取り仕切っていた。主流派となった「シュトラサー派」のブロンズとの指導性とも対立するものではなかった。この頃

になると若手の活動家も多く育ってきた。オックスフォード大学出身のI・アンダーソン (Ian Anderson)⁽¹³⁾、ケンブリッジ大学出身のN・グリフィン (Nick Griffin)⁽¹⁴⁾、東イングランド出身で大卒でありながらワーキングクラスに所属し、ストリートファイターであり、反英雄的態度をとりつづけたD・ホルンド (Derek Hollnd)、東ロンドンのダゲナム市のワーキングクラス出身のJ・パース (Joe Pearce) などが目立ったところである。ウェブスターは、特にNFの事務局長のM・ソルト (Michal Solt) とはうまくいっていた。組織の運営にあたって彼と相談し、アイデアを出し合っていた。ウェブスターにとって気がかりは、グリフィン、ホルンド、ブロンズなどが、イタリアから追放されてイギリスに潜んでいる「武装革命中核軍」(Nuclei Amati Rivoluzionari) に接近していることである。この組織の中心人物は、L・ペトロネ (Luciano Petrone) とR・フィオレ (Roberto Fiore) で、本国で警察官殺しや強盗、また武装グループ結成などで有罪判決を受けたがイギリス亡命を果たした人物である。彼らは、イギリス、西ヨーロッパ、スカンジナビア半島諸国にファシスト系出版物を配布している「ハンコック家」(Hancock Family) にかくまわれ、NFの中の「シュトラサー派」のメンバーと深い関わりをもっていたのである。⁽¹⁵⁾ しかしウェブスターにも決別の日がやってくる。親しかったソルトと共にNFの主流から外されてしまうのである。これには、アンダーソン、グリフィン、ホルンド、ピアス、ブロンズなどの若手がからんでいた。彼はそのあと自ら小さな政治グループを起こし活動を始めた。それは「我らが国家」(Our Nation) と呼ばれるもので、C・ジョーダン⁽¹⁶⁾の先妻などが支援していたが、会合が頻繁に行われるわけでもなく決して目立つ組織ではなかった。ウェブスター自身も半分リタイアの形で、北ロンドンで活字組みの商売をはじめたのである。この追放劇の背景には、彼自身の性格的問題もあったようである。彼は法を犯すことに関しては、ダブルスタンダードで望んだ。つまり、メンバーには少々の法律違反を認めながら、銃器や爆発物を所持する者について警察に情報を流している。これは、もしNFが陰謀疑惑をかけられれば彼が被告席に立たされるので、いくらかでもクリーンのイメージを創りたかったからである。彼は1983年にNFを完全に去ることになる。

除名に近い形ではテンダルもウェブスターも同じである。しかし、80年代を経て90年代の活動の活発さから見ると、テンダルの組織の方がしのいでいた。むしろNFを追い越す勢いだったのである。BNPの出発には旧知の様々なメンバーが集まった。設立時には、1,200人ほどのメンバーが集まったとされている。ジョーダンの「イギリス人運動」(The British Movement) から分派した人たち、A・フォンティーン (Andrew Fountain) が79年

に NF を去り「NF 合法運動」(The NF Constitutional Movement) を創り、さらに分裂して「イギリス民主党」(The British Democratic Party) を創るが、そこからのメンバーも加わった。もちろん元 NF のメンバーもいた。この構成員を見て、またしても、イギリスの「極右」グループの寄せ集めであったと言え、NF のスタート時と全く同じである。テンダルの苦悩がまたここにあるのである。

この 83 年時期で、特に注目すべき「極右」団体を見るとつぎのようなものがあげられる。BNP、NF、「セント ジョージ同盟」(The League of St. George)、「国家社会主義者行動グループ」(The National Socialists Action Group)、「国家行動党」(The National Action Party)、「月曜クラブ」(Monday Club)、「保守党学生連合」(The Federation of Conservative Students) などである。⁽¹⁷⁾

テンダルの BNP の設立の理由は、ウェブスターとの確執や「シュトラサー派」による追放ももちろん大きな原因であるが、その他 79 年の総選挙の失敗があげられる。トータルで 303 人もの立候補者を立てた選挙であったが、平均得票率 1.4% という無惨な結果であった。⁽¹⁸⁾ この敗北に関しては様々な見解がある。⁽¹⁹⁾ テンダル自らは次のことをあげている。それはまず第一にこの組織のリーダーシップの欠如である。第二にこの組織の内密めいたイデオロギーにその敗北の原因があるとしている。そして、第三の原因に首都ロンドンをはじめ移民が多く住む地域での襲撃や暴力事件が一般市民に受け入れられなかったということである。特に、一部指導者による「スキンヘッド」や「フーリガン」を利用した単なる騒乱的行動は国民の反発こそ買い決して受け入れられなかったのである。これらの反省の上にたって、テンダルは新しい組織の設立に向かうのである。第一のリーダーシップの問題は、NF の一番の弱点であった。スタートの時点から「極右」と言えども様々なイデオロギーの持ち主の集まりであり、簡単に結束するようなものではなかった。そして、リーダーシップの問題もこれに絡んでくる。委員長としてテンダルが一番長く勤めたが、完璧なリーダーシップの下にまとまった訳ではなかった。現に 70 年代後半に主流となる「シュトラサー派」などはこれとは全く異なる見解を持っていたのである。テンダルは NF にはないリーダーシップを求めていたのである。それは、一人に執行権や政策策定権を付与するという強力な権限の下での活動を良しとしたのである。第二のイデオロギーの問題は、NF という組織がかなりの思想的幅を持たなければならなかった事情からすれば当然生じて来る問題である。个性的人間の集まりである限り、イデオロギーも抽象的、包括的、非合理的にならざるを得なかった。生物学的決定論、国家主義的人種差別論、シオニ

スト謀略論等は、そのイデオロギー形成の主要な要素であるが、運動の展開の上ではインパクトが強いものにならない。そこで、彼は抽象的イデオロギーに執着するより、もう少し具体的政策論を展開し人々の関心を引こうとしたのである。移民問題はその格好の材料であり、移民に不満を募らせる住民、彼らによって失業させられちいる労働者、ナショナリスティックな若者の関心を一手に引き受けようとしたのである。第三の移民に対する襲撃に関しては、NFのころから盛んに行われテングダル自身もこれらの行為が社会的評価を下げるものと解っていた。これらを反省し一般市民の支持を得ることに関心を払おうとした。しかし、襲撃事件はBNPスタート時から行われた。80年代から90年代を通じて少なくなるどころか、むしろ増加している。この現実をして、テングダルをもってしても、組織の統率力に限界があったという証拠でもあるのである。

3. 「イギリス国民党」の政治路線

93年BNPは、東ロンドンのタワー・ハムレット市のミルウォール区の地方選挙で初めて一人当選者をだすことになる。時のメジャー首相は、オーストラリア首相との会談の中断を必要とするほどのショックを受けたと言われている。⁽²⁰⁾ 90年代初めヨーロッパ各地での「極右」団体の著しい活躍が報じられ、BNPの活発化もその一連の動きと連動するものがあつた。これには、70年代に盛り上がりを見せたネオ・ファシズム運動の再来かとりたてるマスコミもあつた。しかし、この現象を別の角度から分析するマスコミもあつた。BNPなどの「極右」の活動が活発化したとしても、彼らを社会変革の先駆者として位置づけるべきではなく、各地に顕在化しつつある移民問題に、早く政府や諸機関が対応すべきであると主張するものであつた。⁽²¹⁾

ここではまずBNPの選挙戦略から見てみよう。一言でいえば、80年代を通じてBNPはあまり選挙には熱心ではなかつたと言える。83年の総選挙には53名の候補者を立てるが、1.3%の得票率しか取れなかつた。NFはこの時60名の候補者を立てたが1.1%の得票率でBNPよりも少なかつた。⁽²²⁾ しかし、このように得票率こそ低かつたが新し組織としてスタートしたBNPは国民にその名前を覚えてもらうことに成功した。何よりも15分間も全国放送のテレビに出演できたことは、宣伝効果は十分にあつた。しかし、人々の反応は冷たいものがあつた。NFと重なつたイメージを持ち、その組織の新しさより、まったくの同

質の「極右」団体との見方が強く、国民の支持を得るにはほど遠かった。BNPは、80年代半ばから選挙活動で目立った活動をしなくなる。おそらくこの83年の総選挙の結果が彼らの希望をくじき、彼らは戦略変更をせまられたのである。87年の総選挙には、BNPは誰も出馬しなかった。ちなみに、NFは一人だけ出馬したが、これも無惨な結果に終わった。なぜなら、NFは前年に設立以来二度目の大きな分裂を経験したのである。⁽²³⁾ BNPは、ケント州のウイリングに本屋を開業するために資金調達の必要性もあり、金銭的には苦しかった。何よりも供託金が一人当たり25,000ポンドというのは高すぎた。80年代を通じてBNPは国・地方の選挙にそれほど強い関心を示したとは言えない。むしろあまり関心を示さなかったと言ってもよいだろう。このことは、どうしても構成員の統制や志気を弱めるものであった。87年にテンダルは、NFの主流派であるブロンズの「国民戦線の旗グループ」との連帯に失敗する。これは大きな損失であった。なぜなら、このグループには多くの労働者や下層階級の支持者がいたからである。80年の終わりには2,000~3,000人くらいのシンパを含めてメンバーがいたといわれている。⁽²⁴⁾ メンバーの拡大をなかなかはかれないBNPは、組織の資金調達もままならず、そのメンバーの割近くは、俗っぽい読み物や、リーフレット、『ホロコースト・ニュース』(Holocaust News)⁽²⁵⁾などの販売を手がけたり、金のかからないデモ行進などのする程度であった。80年代を通じてBNPの活動は、自らの立場の情宣にエネルギーを注いでいたかの様に思われる。それはマスコミに対する政治的対応でもあった。つまり、マスコミが依然としてNFとBNPを同類視し、一般市民を誤解に導いていることに對抗しようと努力していたのである。テンダルは80年代を通じてBNPの活動の反省をしている。それは増大する国民の不満を十分に吸収しえなかったこと、そしてこのような政治状況を突破できなかったことである。NFが80年代半ばまでイギリスの「極右」団体の主流であったとしても、後半にはBNPにその主流の地位を譲っている。このようなことから、テンダルは、BNPの腑がいなさ、これからの活動の重責を感じるものであった。⁽²⁶⁾

90年代に入りBNPの大きな政治的転換が見られる。それは、地方選挙に焦点をあて、次々に候補者を立てる作戦にでるのである。90年5月のタワー・ハムレット市のホーリー・トリニティ区に候補者を立てる。それは、前のNFの活動家であったS・スミス(Steve Smith)という人物で290票を獲得し9.7%の得票率であった。90年7月には同じ市のパーク区で、この人物は再び立候補し8.4%の得票率を得ている。92年の総選挙にはイースト・エンドの選挙区であるベスナール・グリーンとステップニー区⁽²⁷⁾、そして、ボウとポプラー区で立

候補を立てた。前者にはR・エドモンズ (Richard Edmonds) が、後者には党首テンダルが立候補しそれぞれ 3.6%と 3%を得ている。タワー・ハムレット市に限れば 10%の得票率があったことになる。92年10月タワー・ハムレット市ミルウォール区の地方選でB・オズボーン (Barry Osborne) は 20%の得票率を得ている。そして、93年9月同選挙区で初めて地方議員が誕生することになる。それは、D・ビーコン (Derek Beackon) 候補者で 1,480 票を得て 34%の得票率であった。

ここで、タワー・ハムレット市と言う土地柄に言及しておきたい。ロンドンの東部に位置し元々は造船業の街として栄えたが、その産業の凋落により、街は発展が遅れてしまった。産業振興、工業地区の再開発、都市創りが非常に遅れてしまった地域である。そして、ロンドンでも最も貧しい人々が多く暮らす街であった。失業率は常時 20%台であったし、80%の家は公共のものであったが、住宅密集がもたらす劣悪な住宅環境であった。さらにひどいことには、800 世帯ぐらいが常時ホームレスという状態であった。この市の人口は約 17 万人と言われているが、その三分の一がエスニック・マイノリティであった。そして、その 75%がベンガル人でロンドンでも最大のグループとしてここに生活していたのである。かつての重工業の中心であった伝統あるイースト・エンド地区は、どこも似たり寄ったりで、街は汚く住宅は密集し生活環境としては最悪なものであった。このような状態は、スピタルフィールド、ワッピング、ボウ、ステプニー、ベスナール・グリーン、ポプラーなどにもあてはまった。この地域とは対称的に近代的な造船工業地帯がカナリー・ワーブ・サイトなどに展開されている。このような新地への産業の移転は、薄汚く生活環境の劣悪な地域を飛び地のように残し、そこに社会的に貧しい下層の人々を隔離しておくというような事態を生じさせたのである。これは、社会的空間としての刑務所といってもよいかもしれない。当然このような地域では、異なった民族が入り交じり平和に暮らすような生活空間は成立せず、民族や人種ごとの地区ができ、コミュニケーションや生活慣習の分断を招き、コミュニティとしては十分な機能を果たしえなくなる。さらにこのことが悪化すれば、異民族間同士の争いが日常化し、ついには暴行や殺人事件まで発生するのである。実際この地区ではこれらの事件が多く起こった。92年2月に白人の少年がアジア系の少年グループに襲われると言う希な事件も起きているが⁽²⁸⁾、圧倒的に白人からの黒人やアジア系住民に対する暴力事件が多かったのである。

90年代にBNPは新しい戦略をたてた。それは、いくら国政選挙に出馬しても議員を誕生させることが現実には困難であるので、社会的不安や不満を内包している地域での地方選

拳にまず議員を出して、知名度を上げ、段階的に展開しようとするものである。一般市民を巻き込むにはこのような戦略が良いと判断したのである。しかし、非合法的な暴力事件や襲撃事件をやめたわけではない。市民を巻き込む戦略に都合がよければ、このような行為もいとわなかった。この戦略はまた、抽象的な民族主義イデオロギーに対する不毛な論争から手を引き、具体的な社会問題に焦点をしばり、現実的な運動の中で味方を増やそうとするものである。ミルウォール区は、典型的な彼らの活動の場となったのである。BNPのこの地域での躍進の原因は、移民と生活空間で接近する白人の不可避的な社会的損失、つまり、政治的疎外や、犯罪や失業などの不満が大いに関係しているということである。特にこれを「白人の権利」(Rights for Whites) キャンペーンと位置づけ、BNPは戦略の中心に置くのである。⁽²⁹⁾

さらに、ミルウォール区でのBNPの勝利に関しては、いくつかの要因があげられている。それはBNPなどよりはるかに有力であった「自由民主党」(Liberal Democrats) や「労働党」(Labor Party) などが、BNPに勇気こそ与え不利にならなかったことである。⁽³⁰⁾ つまり、彼らの対立はBNPの得票に有利に働いた。前者が移民の立場に立っていると後者を非難すれば、反労働党支持者の票をBNPは得ることができたし、後者が前者を、その政策のあいまいさで非難する場合には、反自由民主党支持の票を集めることができたのである。両者のどちらのほうかよりBNPに手を貸したかということになると、それは「自由民主党」の方だと言われている。彼らはパンフレットではっきりと白人住民のコミュニティの支持をうたいBNPに近い政策を打ち出していたのである。⁽³¹⁾

しかし、早くも94年4月にビーコンは議席を失うことになる。⁽³²⁾ だが得票数は500以上増えていたのである。この年の9月の選挙では33.86%という得票率を維持していることから、BNP支持の風が逆風になったわけではない。同年BNPはロンドン地区で29人の候補者を立て、全体で13,731票を取り、平均8.39%の得票率であった。95年および96年を通じても支持率は極端に低くなっておらず、それどころか、移民問題をかかえる地域では、議員までは出ずに至らずとも、支持者は若干増えているのである。97年テンドルは自ら、ミルウォール区を含む選挙区から総選挙に立候補している。そこで7.3%と言う得票率を得たことは、BNP史上で二番目の記録となったのである。⁽³³⁾ しかし、反ヨーロッパ連合の政策ではBNPに近い「連合王国独立党」(United Kingdom Independence Party) は、BNPの総得票数約5万票に対して、80万票を獲得していることから比較しても、BNPが議員を出す勢力になるには、まだまだいくつかの障害があったのである。⁽³⁴⁾

このように国政および地方選挙の結果が示すように、BNPの全国的展開はまだまだ厳しいものがあり、特別な地域や地方で比較的活動が活発化している段階と言ってようだろう。しかし、この地方での活躍が、国政レベルでの躍進へと結びつかないという保証はない。時の内務大臣M・ハワード（Michael Howard）も移民政策の重要性を主張し、「極右」の躍進を左右するのもこの移民政策にかかっていると言うのである。BNPのような「ネオ・ファシスト」や「極右」団体が、国会議員を出し国政レベルに活動の舞台をなかなか移せないのは、イギリスの選挙制度にその原因があることは言うまでもない。それは、イギリスの小選挙区制がBNPのような小政党を中央の政治の舞台から遠ざけているのである。当然にも、小政党は比例代表を採用することを強く主張している。しかし、この実現はイギリスにあってはまだまだ困難なようである。⁽³⁵⁾ 従って、BNPのような小さな「極右」政党が、国政レベルにまで上がって来るという心配は今のところない。しかし問題なのは、イギリス国民の中に、たとえ一定の地域であっても大勢の人々がBNPの活動に共振するような民族的不寛容の精神があるということである。もちろん、それは一部の人々であるかもしれない。しかし、この不寛容の精神は、民主主義の対極にある暴力に変化するの容易である。実際に想像をはるかに超える年間にして 13～14 万件的の黒人やアジア系移民に対する暴力事件が生じている。それについて、次に述べてみたい。

4. 民族主義的暴力事件の多発

民族主義者による移民に対する暴力事件は増加の一途をたどっている。BNPが地方選挙で力をつけてくる 80 年代後半から 90 年代前半を見てもその著しい傾向がみられる。⁽³⁶⁾ ちなみに、イングランドとウエールズだけを見ても 89 年に 4,383 件だったこの種の事件が 96 年には 12,199 件になっており、275%の増加である。⁽³⁷⁾ この数字から見てもわかるようにヨーロッパの中でもイギリスは、この種の事件が最も多発している国だと言える。91 年の犯罪白書の中では、民族的差別に基づく約 32,500 件の暴行と 26,000 件におよぶ破壊行為、そして 52,000 件の脅迫行為が報告されている。73 万件におよぶエスニック・マイノリティに対する犯罪行為の内 18%の 13 万件の中で、黒人に対するものが 41,000 件、アジア系移民に対するものが 89,000 件である。この種の事件の多発の原因として、警察力の低下、ないし警察による目こぼしが多いのではないとも言われている。被害者も警察

に対する信頼を失い、実際に警察を呼ぶべき状況でも、それをやめてしまうと言う事態が起こっている。⁽³⁸⁾

民族主義的暴力事件の最も対象とされる黒人およびアジア系移民は、イギリスにどのくらい住んでいるのであろうか。91 年の統計によれば、イギリスの人口約 5,900 万人の内 4.26%にあたる約 247 万人が住んでいる。さらに細かく見ると、カリブ系黒人が全人口の 0.9%、アフリカ系黒人が 0.38%、インド系が 1.53%、パキスタン系が 0.87%、バングラッデシュ系が 0.3%、中国系が 0.29%となっている。⁽³⁹⁾ 政府の移民抑制政策により流入人口だけは減ったが、イギリスでの二世や三世の出生により全体の数はあまり変わってない。ドイツではトルコ人の割合が、フランスでは北アフリカ系黒人の割合が多いが、イギリスではヨーロッパの中でも黒人やアジア系移民の人口に対する割合が高い国なのである。

エスニック・マイノリティに対する白人の犯罪は、殺人、暴行、嫌がらせ、器物破損、脅迫、放火など様々である。ロンドンのグリーンビッチ区の例をとると、その犯罪の中身が見えてくる。この町の人口は約 21 万 7 千人で 12.7%がエスニック・マイノリティである。85 年～95 年までの統計を見ると、殺人は 91 年 2 件、92 年 1 件、93 年 1 件起きている。目立つのは、器物破損で 85 年 182 件が 95 年には 273 件と増加している。また警察官よる嫌がらせなども報告されており、92 年の 61 件を最高に 95 年には 26 件となっている。またこれらの行為のうち特異なものがある。それはイギリスに特有なものかもしれないが、郵便受けに人間の人糞を投げ込むものがある。92 年がトップで 262 件も発生している。何と言っても多いのが民族主義者による虐待や脅迫である。85 年 116 件だったものが、92 年に急増し 198 件となり、93 年 297 件、94 年 499 件、95 年 504 件と約 5 倍の勢いで増えている。これは何を物語るのか。国内外の問題を解決しながら、着実に政治の安定化を図ってきたかに見えるイギリスにあって、移民政策の問題がいかに困難だかを物語っているのである。この地域の犯罪数の全体としては、85 年に 437 件あったものが、95 年には 2.5 倍の 1,000 件になっている。⁽⁴⁰⁾ しかも、警察に報告されたケースは、これらよりはるかに少ないのだ。85 年でわずか 85 件、95 年で 383 件という数字である。これはロンドンの一地域でのこの数字である。イギリス全体としては、警察に報告されたものされていないものを含めると、犯罪白書にみられるように驚くべき数字になるのである。この種の犯罪行為の多発は、処罰規定の整備にもかかわらず、良い結果を見ていないのが現状である。

また次のようなレポートも興味あるところである。これは「内政委員会」(Home Affairs Committee) が第三回レポートとして提出したものであるが、犯罪者の類型とそれが事件

に占める割合である。男性 73.7%、女性 3.3%と圧倒的に男性が多い。年齢は 15 歳から 25 歳の若者が 68%を占めている。グループ行動が 69%で、単独では 20%と三分の一以下である。また白人によるものが 90%と圧倒的に多く、カリブ系はわずか 0.5%、入り混ざった民族グループのものが 2.9%となっている。これらの数値からしても、民族主義的動機から起こった事件の実行者は、その主なるものが、男性で、15 歳から 25 歳くらいの若者で、グループ行動で、白人であることが浮かびあがってくる。⁽⁴¹⁾

以上のように、イギリスでの民族主義的暴力事件の対象は圧倒的に黒人やアジア系民族に対してだった。しかし、ここでその他の民族に対しても目だたないがこの種の事件が厳然と存在していたことに若干ふれておきたい。イギリスには反アイルランド思想というものが、アイルランド人に対する嫌がらせもある。ロンドンの南にあるアイルランド人のコミュニティでの調査によれば、対象となった人々の 44%は何らかの嫌がらせを体験し、その内 26%は物理的暴力を受け、7%は彼らの家を破壊されていると言う報告書もある。⁽⁴²⁾ また、反ユダヤ主義の思想も根深く、91 年 387 件、92 年 281 件という反ユダヤ主義に基づく犯罪があった。その内 239 件はロンドンで起こっているのである。今のところはユダヤ人コミュニティは冷静を保っているが、反ユダヤの大々的な言葉や文句が増幅してくることに、神経をとがらせているのが実際である。

さてここで、これらの民族主義的暴力事件に、BNPやその他のグループがどのくらい関わっていたか見てみよう。BNPの組織自体がこの種の暴力事件に直接関与しているのかどうか意見は様々である。しかし、暴力行為を実行する「フリーガン」や「スキンヘッド」の若者がBNPのメンバーであったり、また彼らをBNPが積極的に勧誘し利用していた事実からしても、その責任は免れることはできないであろう。BNPの幹部には、この種の暴力事件をそそのかす者すらいたのである。94 年 4 月にミルウォール区で議員となったビーコンは一年足らずで議席を失うのであるが、この年の 1 月ごろに、BNPの関係する暴力事件が多発する。前年の同時期に比べると 300%の増加である。これは選挙を期にして、BNPが有権者やサポータの動員をはかり、移民居住区と白人居住区が隣接するところで挑発を繰り返すからである。この時期のメンバーは 1,500~2,000 人とされているが、組織としては、一方でこのような暴力主義的メンバーをかかえ、他方で選挙に打って出る合法政党を表明するという矛盾も抱えていたのである。テンダルの犯罪歴はというと、60 年代にネオ・ナチ組織とその活動の廉で有罪判決を受け、その後 86 年に過激な民族主義者として、異民族を憎悪をもって刺激した廉で 12 ヶ月の実刑判決を受けている程度である。しかし、

R . エドモンド (Richard Edmonds) という全国運動推進本部の幹部やその仲間は、黒人を殺傷したことに連座して有罪判決を受けている。またこの本部の幹部である A . レコマー (Anthony Lecomber) は、鉄クギ爆弾や手榴弾の所持の罪で 87 年に有罪判決を受け 3 年ほど入獄している。また彼は 90 年に傷害事件を起こし、91 年にはユダヤ人教師を暴行し 3 年の有罪判決を受けている猛者である。93 年から 95 年にかけて BNP の関わった主な事件とその判決について見てみよう。93 年 BNP の三人のメンバーが、ロンドンで傷害事件を起こしている。これは有罪となっていない。しかし、マンズフィールドで BNP の一人が乱闘事件を起こし、120 時間の拘束を受けている。94 年には BNP が関わる多くの犯罪があった。ブラックプールでの襲撃事件で一人が一年の実刑判決を、おなじ地域で二人の BNP メンバーがブルガリア人宅を放火し、2 年の実刑判決を受けている。ノースハンプトの障害事件で一人が 1 年の実刑判決を受ける。ブラックプールで NF と BNP のメンバー三人が暴行と火器不法所持で 1 ~ 3 年の実刑判決を受ける。ロンドンで BNP のメンバー三人が騒乱罪で 51 ヶ月の実刑判決を受ける。サンダーランドで三人のメンバーが同じく騒乱罪で 18 ヶ月 ~ 3 年の実刑判決を受ける。ニューカッスルで一人が暴行事件を起こし 12 ヶ月の実刑判決を受けている。95 年になると C18 がより多くこのような犯罪行為に関係するようになる。この年、ティーサイドで BNP のメンバー三人が、労働党員と混血の若者を襲い 2 年の実刑判決を受けている。(43)

殺人に至るまでの事件は、暴行事件に比べればそれほど多くはないが、毎年のように起きている。その中でも 93 年の S . ローレンス (Stephen Lawrence) 事件は、我が国の新聞にも大きく報じられ話題となったので言及しておこう。(44) 4 月 22 日、ロンドン郊外に住む 18 歳の黒人少年であるローレンス君が、帰宅途中のバスを待っている路上で 4 ~ 6 人の若者によって襲われ、ナイフで刺されて死亡した事件である。92 年に BNP の司令部がこの近くにできて起きた四番目の殺人事件であった。この事件がその後波紋を呼ぶのは、5 人が逮捕され 2 人が殺人罪で起訴されたが証拠不十分でそれが却下されたことである。そして後で様々な疑惑がでてきた。例えば白人少年の目撃証言もあるが、彼は人物特定に対して報復を恐れてそれを拒否していること。また、いくつかの目撃証言も出てきているのに十分な捜査をせず証拠を得る努力をしなかったこと。ローレンス少年を黒人同士のケンカの相手として容疑者扱いをしていること。家族の独自の捜査を無視していることなどである。この事件は再び捜査を求める声が高まり、ブレア政権は、97 年 7 月に元高等法院判事を特別捜査官に任命し捜査に乗り出したのである。この調査書が 99 年 2 月に下院で報告さ

れ話題となった。それは、イギリスに根づく人種差別を指摘するものであり、この人種差別が偏見や暴力行為を産み出していると断言し、さらなる人種差別に対する法的措置が必要であると説くものであった。それと同時に、イギリスに根づく警察官のマイノリティに対する態度も厳しく指摘されたのである。そして、マイノリティに対する国民の態度は教育をさらに徹底することによりその解決の方向を見つけださねばならないとしたのである。しかし、いづれの方策にしても長く時間のかかる、そして完全なる解決策とはならない方策であるかもしれない。この調査書が下院に出された翌日に、ローレンス少年の倒れた場所に建てられた追悼の石板に、何者かが白ペンキをかける事件が発生している。これこそは、イギリス社会に巣くう人種差別の根深い痕跡を物語るものであろうか。

5. むすびにかえて

80年代のNFの分裂を通じてBNPが設立されたこともあり、前者の勢力は弱い者になって90年代に至っている。BNPも90年代初頭において地域的に活発化したが必ずしもその勢いが持続している訳ではない。せいぜい1,500~2,000人の構成員を行ったり来たりしている程度である。しかし、この組織が、今日イギリスで最も恐れられているテロ組織C18と関係をもっていたことは確かである。ただこの関係は93年のミルウォールの選挙の前に切れていたとされる。この選挙にはC18の協力はなく、むしろ妨害があった。テングダルはC18がBNPを乗っ取るのではないかと警戒心すら持っていた。それはBNPの街頭活動などにC18は積極的に関与してきたからである。⁽⁴⁵⁾ また、BNPはスキンヘッド集団である「血と名誉」(Blood and Honour)⁽⁴⁶⁾とも関係があったことは明白である。BNPは、イギリス社会の中で移民問題に端を発した生活環境の悪化や失業問題にフラストレーションを募らせるこれらの若者集団をうまく利用できたのである。さらに、BNPはフリーガン集団「チェルシア・ヘッドハンター」(Chelsea Headhunter)とも関係があった。この集団は先の「血と名誉」とメンバーが重なっているケースもあり、極度に民族大衆主義的でありBNPと思想的に重なりあう点もあった。BNPのメンバーにはこの集団に所属している者も何人かいた。このようなテロリスト集団やファナティカルなギャング集団の関係を、BNPは都合の悪い時は沈黙するかもしれないが、決して否定できないのである。もちろんこの関係が必ずしも絶対的で一枚岩のようなものではなかったことも確かである。特に

90 年以降は、BNP の議会進出路線とも重なり、このような反社会的過激派集団との距離ができるようになる。それはむしろイデオロギー的対立と言うより、これらのテロリスト集団やファナティカルなギャング集団が、麻薬の取り引きや、武器の所持や、無差別的暴力行為に関係し政治集団としての本質を失って行ったことと関連している。BNP はこれらの集団を政治集団ではないと判断したからである。

さてここで 90 年代初頭における BNP の政策の特色を簡単に見ておこう。彼らは『先鋭部隊』(Spearhead) と『イギリス国家社会主義者』(British Nationalists) という二つの定期刊行物を発行して、これらを通じて情宣活動を行っている。そこでの主張を大雑把にまとめると次のようになる。 ナチスによるホロコーストの事実の否定、 実効性のある強力な法律や法令の制定(特に移民対策に関して)、 EU へのイギリスの参加に反対、 北アイルランドにおける準軍隊的忠誠主義者にたいする支持、 国家大衆主義との近似などがあげられる。⁽⁴⁷⁾ また彼らがヨーロッパの「極右」や「新右翼」と結びつきを強化していることに注目しなければならない。BNP はそれらの団体はノーマルな政治団体であると表明しているが、実際はテロリストグループであったり、ファナティカルな民族主義者団体であり、これらの影響力は BNP にとって、良きにつけ悪しきにつけ多大なものがある。彼らはヨーロッパ各国で開かれる大会によく招待されたし、イギリスでも大会を開き、ホスト役としても活躍している。特に 90 年代は BNP がイギリスでは国際交流の中心的団体であった。なぜなら、NF はこのころになると I. アンダーソン(Ian Anderson) の下に 300 人ほどになり、その方向性も見失いがちであった。彼らの主張は保守党の民族主義者の強硬路線に近くなっている。また、C18 のようなテロリスト集団は完全に地下にもぐり、組織も指導性も不安定になっているからである。

BNP を含め、ヨーロッパ各国の「極右」の活動は大まかに言って現実路線をとっている。それはまた、このような路線をとるに都合のよい具体的問題がたくさんあるということである。我々の危惧は、このような団体が発展し、国際的な連帯の下にさらに強力になりうるのかということである。この問題に関しては、現在のところそれほど心配はしなくともよいかもしれない。その証拠に BNP をはじめヨーロッパ各国の「極右」団体の構成員の数はそれほど増えていないからである。それはまたヨーロッパ人の歴史意識や合理的理性がこれらのことを阻んでいるのかもしれない。しかし、経済の発展や、社会道徳の発揚、多文化主義の定着が今後順調に進展しないとすれば、国内外の政治・経済・福祉・環境問題もからみ他民族国家の矛盾が露出し、その不満のはけ口として「極右」団体が利用さ

れるかもしれない。21世紀になっても、今まで通りの移民に対する施策しか講じないならば、ヨーロッパの人口の三分の一が移民の人口で占められるかもしれないという予測もある。豊かな国への大移動である。そうなった時、このような「極右」団体の各国の強力な連帯の危険性を誰もが否定できないのである。

注

- (1) 山口氏によれば、これらの団体の特色は ナショナリズム、 権威主義、 反多元主義、 不平等のイデオロギーを有していると指摘し、その危険性を選挙過程にだけ注目するのではなく、社会的影響、サブカルチャーや「スキンヘッド」などの暴力行動、そして一般市民の支持の潜在力に注目しなければならぬとしている。(山口定、高橋進編『ヨーロッパの新右翼』朝日新書 1996年 26頁。)
- (2) B.Buford, Among The Thugs, Storn and Wylie, 1991。(北代美和子訳『フーリガン戦記』白水社 1994年)これは、極右活動、人種差別、犯罪に走るフーリガンの実態についての生々しいドキュメントである。
- (3) H.Kitschelt, The Radical Right in Western Europe, Michigan Univ.Press, 1995, p.256.
- (4) 山口定 高橋進編 前掲書 38頁。
- (5) 拙稿「戦後イギリスのネオ・ファシスト団体の思想と行動 - 『国民戦線』(National Front)を中心に - 」 埼玉女子短期大学紀要 1999年 第10号参照。
- (6) 『朝日新聞』 1999年4月29日 朝刊。
- (7) 90年に入りBNPやNFを凌ぐテロ活動や人種差別的暴力事件を起こしているグループである。このテロ組織の実態はそれほど詳しく解明されていない。入会の際も誰でもが自由に入れるという訳ではなく、政治性や肉体的に適しているかどうかの審査があり、入会が行われるようである。『レッド・ウォッチ』(Redwatch)という雑誌により、そのメンバーが解った。幹部にS.サージェント(Steven Sargent)と二人の兄弟がいる。一人はウェリアム(Wiliam)と言い70年代はNFにいた。しかし、彼の生涯はまさに非合法活動の生涯であった。もう一人は、ポール・ダビット(Paul David)と言い、後に「チャアリー」(Charlie)や「ジンジャー・ピッグ」(Giger Pig)と呼ばれ無法者として恐れられている。彼は麻薬の密輸や武器所持で捕まったり、「スキンヘッド」やロックミュージシャン仲間でも知られた人物であった。またサッカーの「フーリガン」仲間でも一目置かれた人物であった。このファミリーにはE.ヴィカー(Eddy Whicker)やP.バラード(Paul Ballard)がいた。前者は狂信的なアイルランド忠誠主義者で、「極右」と「アルスター防衛協会」(Ulster Defence Association)を繋ぐ人物でもあった。後者は元BNやNFのメンバーで公務員であるが、60年代はヒッピーであった。かなり知的な人物で数ヶ国語を話せる人物でもあった。アジ演説などは得意なもので、BNPの主メンバーとして選挙に出馬したこともある。92年ごろになると「スキンヘッド」グル

ープを乗っ取るくらいの力をつけている。93 年ごろになると BNP とは仲が悪くなる。彼らは BNP の選挙にも非協力的になり、93 年初めて地方議員が出るミルウォールの選挙では一切の協力はなかった。それどころか、BNP のメンバーや選挙候補者を名指して攻撃をするようになる。彼らのテロ行為は益々エスカレートして行き、自分たちに都合の悪いテレビ番組を作ったプロデューサーを脅迫したり、反民族主義者を雑誌で名指して脅迫するようになる。C18 のメンバーの中には、傭兵としてユーゴの内戦にも参加した者もいる。とにかく、この組織はそのメンバーの記録もなく、支部や下部組織も作らず、集会も開かない。そして、何と言っても麻薬や銃器の不法取り引きを行っているということで、警察もその対応に苦慮しているというのが現状である。今回のテロにかかわったとされる「白いオオカミ」(The White Wolves) は、C18 の一部が作ったとされ、雑誌のタイトルからこの名前がつけられたとされているが、実態はよく解っていない。(G.Gable, 'Britain's Nazi Underground', L.Cheles, R.Ferguson, M.Vaughan ed., The Far Right in Western and Europe, Longman, 1995, pp.261~6. 以下 G.Gable と略す)

- (8) C.Husband ed., Race in Britain Continuity and Change, Hutchinson, 1982, p.263. に詳しい相関図がある。
- (9) この「シュトラサー派」とは G. シュトラサー (Gregor Strasser) から来たもので、彼はヒトラーの 1923 年のミュンヘン暴動に参加しナチ党員になる。しかし、ベルサイユ条約反対の立場から共産党との協力を説いたためナチ党員に暗殺される。この派は農業用地を崩壊に導く金融資本主義に反対し、権力の非集中化を主張する議会制民主主義にかわりコーポラティズムを主張するものである。またこれは産業資本主義よりドイツの伝統的な中世の経済形態を理想としナショナル・サンジカリズムに近いユートピアを志向するものである。NF の初代委員長の A. K. チェスタートン (Arthur Keith Chesterton) の見解に近いものと言われる。テンダルはこのようなイデオロギーに対して賛同しなかったのであり運動論においても意見を異にした。「シュトラサー派」はヒトラーのような極端なカリスマ性やリーダーシップにはどちらかという批判的であった。テンダルはこのことを極力望み、強調したのである。(R.Thurlow, Fascism in Britain A History, 1918-1985, Basil Blackwell, 1987, pp.298~9.)
- (10) R.Eatwell, 'The Esoteric Ideology of the National Front in the 1980s', M.Cronin ed., The Failure of British Fascism, Macmillan, 1996, p.106.
- (11) G.Gable, 'The Far Right in Contemporary Britain', L.Cheles, R.Ferguson, M.Vaughan ed., Neo Fascism in Europe, Longman, 1991, p.248. 以下 G.Gable と略す。
- (12) G.Gable, p.258.
- (13) 彼は A. ブロンズと組み、「国民戦線の旗」(The Flag Group of NF) という組織をつくり、『前衛』(Vanguard) という雑誌を発行していた。彼らは労働者や下層階級の支持を得て 80 年終わりには 2,000 人ほどの支持者がいた。(R.Eatwell, op.cit., p.112.)
- (14) 彼は P. ハリントン (Patrich Harrington) とともに 80 年代の終わりに NF のリーダーになるが、NF の中に「政治的団結」(Political Soldiers) のグループを結成し、『蜂起』(Rising) という雑誌を出していた。イギリスに亡命中のイタリアのテロ組織「武装革命中核軍」の影響を受け、また、戦前

戦後イギリスのネオ・ファシスト団体の思想と行動

- からの MSI (Movimento Sociale Italiano) の指導者であった J . エボラ (Julius Evola) の影響も受けていた。(ibid., p.111.)
- (15) G.Gable , p.251.
- (16) 彼は A . フォンティーン (Andrew Fountain) や J . ビーン (John Bean) とともに NF の設立に大きく寄与することになる 60 年の BNP (The British National Party) を作り、やがて 62 年「国家社会主義運動」(The National Socialist Movement) を、68 年「イギリス人運動」(The British Movement) を設立し別れていった。彼は現在ヨークシャーに住み、彼の師匠である「帝国ファシスト連盟」(Imperial Fascist League) のリーダーの A . リーズ (Arnold Leese) の出版物である『ゴシックの波紋』(Gothic Rippers) の複製品などを作り反ユダヤの宣伝に努めている。(ibid., p.249.)
- (17) ibid., p.250.
- (18) P.Hainsworth ed., The Extreme Right in Europe and the USA, Pinter, 1992, p.179.
- (19) この原因については拙稿の前掲論文 65 ~ 66 頁に詳しい。
- (20) N.Copsey, 'Contemporary Fascism in the Local Arena: The British National Party and Rights for Whites', M.Cronin ed., The Failure of British Fascism , Macmillan, 1966 , p.118.
- (21) Daily Mail 18 September 1993 p.8.
- (22) P.Hainsworth ed., op.cit., p.179.
- (23) NF の 5,000 人のメンバーのうち、3,000 人がブロンズのグループへ、2,000 人がグリフィンのグループへと分かれた。前者にはアンダーソン、パース、M . ウィングフィールド (Martin Wingfield)、I . アクトン (Ian Acton) などがいた。彼らは厳格な資格のもとでの街頭活動を重視し「国民戦線の旗」を名乗り、NF の主流となった。後者のグループにはホルランド、ハリントン、G . ウィリアムソン (Graham Williamson) などがいた。量より質をとり、将来の組織づくりのために人材の育成に力を入れ、「政治的団結」を名乗った。(R.Eawell , op.cit., p.111.)
- (24) N.Copsey , op.cit., p.122.
- (25) R . ハーウッド (Richard Harwood) 別名 R . フェラール (Richard Verrall) は NF の幹部を辞めたあと『ホロコースト・ニュース』(Holocaust News) の編集長になり、これらの出版物を通じて 600 万人のおよぶユダヤ人虐殺説を否定する見解を出すのである。(R.Thrlow , op.cit., p.249.)
- (26) N.Copsey, op.cit., p.124.
- (27) 70 年代にこの地区で NF の人種差別的襲撃はすさまじいものがあった。これに関して、この地区の商業委員会がまとめたレポートがある。Blood on the Streets : A Report by Bethnal Green and Stepney Trades Council on Racial Attacks in East London , 1978.
- (28) N.Copsey, op.cit., p.129.
- (29) 『ガーディアン』(The Guardian) の記者の D . セサラニヤ (David Cesarani) 『新政治家』(New Statesman) の記者のシパナンダン (Sivanandan) は、BNP の躍進の原因を白人コミュニティの復活に BNP が注目し、このコミュニティの復活と民族主義を結び付け、白人の支持を獲得したことであると言ってる。(ibid., p.126.)
- (30) 80 年代における選挙活動で、「労働党」とアジア・アフリカ系住民の関係については以下のものに詳しい。A.M.Messina, Race Party Competition in Britain, Clarendon, 1989, pp.150 ~ 77.

- (31) 92 年のミルウォール選挙において、「自由民主党」はリーフレットの中で次のような主張をしている。「自由民主党」は白人住民のコミュニティの積極的支持者である。「労働党」は本国人の住宅政策に消極的でありながら、積極的な差別政策をとろうとしていることは矛盾している。(N.Copsey, *op.cit.*, p.132.)
- (32) これに関してはマスコミの反 BNP 報道が強力に行われた結果であるととされている。(H.G.Betz, S.Immerfall ed., *The New Politics of Right*, Macmillan, 1998, p.150.)
- (33) この総選挙では、NF は 4 人の候補者を立てたがわずか 1% の得票率であった。他方 BNP は 54 人の候補者を立て 3 人が 5% 以上の得票率があり、平均 1% に満たなかった中で、テンダルのこの数字は特に高いものであった。(J.G.Kelles, *The Politics of Nationalism and Ethnicity*, Macmillan, 1998, p. 126.)
- (34) H.G.Betz, S.Immerfall ed., *op.cit.*, p.150.
- (35) イギリスは今、選挙制度改革論議が高まっている。ブレア首相が設けた検討委員会が 10 月末に改革案を発表した。それは、定数の 80~85% を小選挙区で、15~20% を比例区で選ぶ小選挙区比例代表併用制と呼ばれるものである。しかし、小選挙区制を伝統としてきたイギリスにあって、そう簡単に改革が進まないというのが大方の見方である。(『朝日新聞』 1998 年 11 月 29 日 朝刊。)
- (36) J.Solomos, *Race and Racism in Britain*, 2ed., 1993, pp.180~97.
- (37) Human Rights Watch, *Racist Violence in the United Kingdom*, 1997, p.4.
- (38) *ibid.*, p.1.
- (39) *ibid.*, p.5.
- (40) *ibid.*, p.9.
- (41) *ibid.*, p.12.
- (42) *ibid.*, p.13.
- (43) *ibid.*, pp.17~8.
- (44) 『朝日新聞』 1999 年 3 月 12 日 朝刊。
- (45) テンダルは、93 年 10 月 14 日に BNP の各支部に C18 と決別宣言の報告書を出している。この報告書の中身は C18 のようなテロや、ストリートギャングの行為を止め、合法的活動を通じて、95 年 5 月の地方選挙に勝利する旨を強調するものであった。しかし、C18 は、94 年の年が明けると、BNP の地方選挙立候補者に対しテロ行為にでている。その対象は A・レコマー、M・ニューランド(Michael Newland)、E・バトラー(Eddy Butler) などであった。(G.Gable, p.267.)
- (46) I.S. ドナルドソン(Ian Stuart Donaldson) という人物がリーダーで、彼が死んだ後、C18 の幹部 C・サージェントがこの組織の実権と握り、支配下に入れた。フリーガンはイギリスに限らず、オランダ、ベルギー、フランス、ドイツ、イタリアとヨーロッパ各国にいる。彼らはサッカーが開かれる会場ごとに移動し外国に出かけることもしばしばある。敵方チームとの衝突を起こし、ヨーロッパ各国はその対応を含め苦慮している。(*ibid.*, p.263.)
- (47) *ibid.*, p.267.